



‘丘の上の緑豊かな環境に位置します’

社会福祉法人賛育会 特別養護老人ホーム 清風園 様

- 創立：1964年(昭和39年)
- 住所：東京都町田市金井7丁目17番13号
- TEL：042-735-3000
- URL：https://www.san-ikukai.or.jp/seifu-en/index.html

お客様訪問

No.35

特別養護老人ホームの清風園様は、昭和39年に東京都町田市金井町に設立されました。今回は施設長の吉田美香様にお話を伺いました。

■清風園様の特徴を教えてください

東京都で二番目に設立された特別養護老人ホームとして、今年で50周年を迎えました。施設の基本方針に「隣人愛」を掲げ、「お会いする全ての人々に対して、おもてなしの心を持つ」という理念を人材育成の第一義として、職員の教育を行っております。

■利用者様やそのご家族の方々にに対して、どんな点に気を付けていますか？

最重要課題である衛生面は当然として、安全、安心の徹底、何よりも笑顔になれる施設「ここがいい」と思われる様に心が



▲施設長の吉田美香様

けております。

■トイレに関して気をつけている点や、工夫している点を教えてください

トイレは、快適に過ごす事が出来るか否かの判断基準の一つです。より良いトイレ環境の為、「改善+α」という職員の意識環境を整えております。年に数回「ニオイについてのアンケート」を実施し、迅速な改善に繋がっています。

■アメニティを導入した理由と、導入して良かった点を教えてください

ニオイの問題は、常に意識している重要課題です。当施設では、尿や便等の排泄臭に加え、生活臭にも注目しており、アメニティブランディングさんの消臭提案を導入する事に決めました。導入後は、利用者様のご家族や職員からの反応も上々です。また、外部評価機関や行政からも、福祉施設特有のニオイが全くしないとの評価をいただいております。他にも、全館節水

サービスも導入しており、提案通りの効果が得られています。

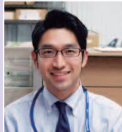
■最後に担当(ショップ)へ一言お願いします

当施設の担当者である佐竹さんは、誠実でフットワークが抜群に良く、どんな時間帯でもこちら側の都合に合わせて来てくれます。私にとって、ニオイのエキスパートである佐竹さんは心強い味方です。



▲清潔に管理されたトイレ。壁には森林浴消臭器ポンボアを設置。

☆ 私が担当しています! ☆



SHOP

アメニティブランディング/(株)産業ブランディング 東京都八王子市

佐竹 明(さたけ あきら)さん トイレ診断士 ID：11-0213-0350

同施設様は、施設長を筆頭に、素敵なスタッフの皆様が、目の前の利用者様と、常に笑顔で、真剣且つ懸命に向き合っておられます。何う度にも、謙虚さや、元気のお裾分けをして頂いており、感謝が絶えません。

主婦ライター・水仙の水に流せない“廁”論

第11回

絶対見てほしい! うんちとトイレの企画展『トイレ? 行ットイレ!!』

最近、きれいなトイレが増えてきましたよね。私がアメニティに入社した15年前は「トイレの4K(くさい・汚い・こわい・



▲うんちのオブジェと便器のすべり台

暗い)を解消する」がセールストークでしたが、もはや4Kトイレを見つけるほうが難しいほどです。

でも意識の面では昔と変わっていない部分が多くあります。それを一番感じるのは、小学生の“学校でうんちができない”問題。「恥ずかしい」「他人に知られたくない」という理由で学校のトイレでうんちができない子の割合は、約50%と言われています。この状況、実はここ10年くらい変わっていないん

です。これってどうなのよ…!? と思っていたら、東京・お台場の日本科学未来館で『トイレ? 行ットイレ! ~ボクらのうんちと地球のみらい』という企画展が開催されるとのこと。さっそく行ってきました。

見た感想は、「これを見ればかなり解決するんじゃないの?」と思うくらい素晴らしい内容でした。最初は、トイレが私たちに怒っている場面から始まります。「いつもボクを使っているのに、『くさい』『きたな

水仙 美樹

アメニティに約10年間勤務したのち、第二子出産を機に退職。一念発起して、フリーライターの道へ。現在は主婦&ママの視点から地域やアートなどの情報を発信中。トイレウォッチも大好き!



い』ってだけで、感謝してくれない!」って。ホントにその通りだと思いませんか?

トイレも排泄も大事なことでとわかっていたら、学校でうんちをするのが恥ずかしいとか、それを見ていじめるなんてことが起こるはずがありません。このほかに、リアルなうんち模型や、トイレのすべり台など、見どころがいっぱい。見終わったあとは、「トイレ、ありがとう」って言いたくなる企画展ですよ。(10月5日まで開催中)

編集後記

白倉先生のトイレコレクション凄いですね!私も今度見させていただこうと思います。さて、「かわや版」は前回で50号・創刊10周年を迎えたのですが、アメニティ本部のある神奈川県内の情報を発信し続けるタウンニュースさんが、なんと「トイレ新聞」10周年と題して取材してくれました。しかも写真つき。少し緊張しましたが、上手にまとめてもらい、プロは違うなあと感じました。(雄撃弾治)

Information!

「トイレ診断士」によるブログをご存知ですか。全国のトイレ診断士が、トイレを通して思うこと、感じること、診断の実情などを赤裸々に語っています。お気軽に覗いてみてください。



【発行所】株式会社アメニティ
〒221-0863 横浜市中区羽沢町685
TEL:045-371-7676(代) FAX:045-371-7717
Copyright © 2014 AMENITY INC. All rights reserved.

トイレを楽しくする新聞



かわや版

KAWAYABAN



2014 秋号
Vol. 51

特集

アントイレプランナー 白倉正子先生インタビュー!

「アントイレプランナー」という聞き慣れない職業の女性がいます。「アントレプレナー(起業家)」と「トイレ」と「プランナー」を掛け合わせた造語で、自らを「トイレの水先案内人」と呼ぶ、トイレ評論家の白倉正子先生です。今回は白倉先生のトイレにかける熱い思いをお聞きすると共に、ご自宅にある貴重なトイレコレクションを見せていただきました。



entiletplaner

汚いトイレをきれいにする「トイレの救世主」の願いを込めたマスクット「teliot(テリオット)くん」

■そもそもなぜトイレに興味を持たれたのですか?

学生時代にストッキングをはき替えようと思ったトイレのあまりの不便さに怒りを覚えて…。毎日使うトイレなのに、なんでこんなに汚くて使いにくいのか!と。そんな怒りが興味に変わり、大学の卒論はトイレの経営学について書きました。

その過程で、トイレが汚いとか不便だというのは、日本の社会の闇の部分だトイレという陰の空間に表れたものだと思えるようになりました。この状況を誰かがなんとかしなければいけない。まずはトイレやトイレ掃除のイメージを変えたいという一心で卒業後にトイレの企画会社「アントイレプランナー」を立ち上げました。

■トイレの企画会社とは具体的に何をしているんですか?

自分の仕事は、一般の人にトイレをわかりやすく伝える「トイレの水先案内人」だと自負しています。そういった観点で講演活動やテレビ出演などしていますが、面白いところでは、札幌市のYOSAKOIソーラン祭りのトイレ対策委員長を務めたり、トイレ清掃道具の開発コンサルティングなどを行ってきました。最近ではトイレ関連の展示イベントのコーディネートや、普通では入れない施設にある貴重なトイレの見学会を企画したりしています。

実は私が発案するよりも、「こんなことできないか?」と相談されることの方が多いんです。それだけトイレの専門知識が求められているにもかかわらず、それに

答えられる専門家が少ないということなのでしょうね…。

■白倉先生がトイレ研究をされた18年の間にトイレを取り巻く環境は変わりましたか?

ハード面では、誰もが使いやすく快適なトイレになってきたのは皆さん感じていると思います。一方ソフト面の場合、以前はトイレの話題なんて「はばかられるもの」と、まさに「臭いものに蓋」だったわけです。しかし最近は真剣な議論がされるようになりました。

例えば「車椅子で利用できるトイレはどこにあるか?」といった情報が得やすくなったという具合です。

■ではこれからトイレはどのような方向に向かっていくでしょうか?

日本のトイレの進化はとどまることを知りません。しかし世界にはまだまだトイレがなくて命の危険にさらされている人たちがたくさんいるのです。日本の技術をそういった問題の

解決に積極的に使っていくべきだと思います。

ちなみに私は「トイレから地球革命!」を理念に掲げています。人が排泄をするのは当たり前のことですが、日本のように快適なトイレで用が足せるのは、世界的に見て当たり前とは言えません。その環境に感謝し、トイレを通してマナーの向上や、謙虚な心が育ってくれればと願います。いずれは、快適なトイレが世界の平和や地球環境を守ることにもつながると信じています。

■最後に今後の計画などお聞かせください。

長年抱えている夢は「トイレのデパート」を作ることです。つまり「トイレについてわからないことがあれば、ここなら解決してくれる」と信頼される、総合シンクタンクのようなものを、構想しています。少しずつですが社会をトイレから改善する活動を続けていきたいと思っています。(レポート：セルベッチオ中嶋)

● 白倉先生のトイレコレクション ●

18年に渡るトイレ研究の中で集められた貴重なトイレ関連コレクションが約5畳の部屋に所狭しと並べられていました。いったいいくつあるのかはご本人にもわからないとのこと。そのほんの一部をご紹介します!



▲キャラクターやご当地デザインのトイレットペーパー



▲明治時代の小便器と、足を置く位置を示す陶器製のスリッパ(=廁下駄)。



▲(左)昭和25年ごろの吊り下げ式手洗い器。(右)腸内の宿便を取る腸内洗浄器。



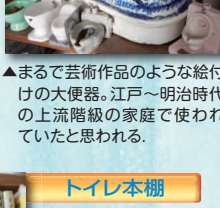
▲大便秘型の時計やライター、灰皿などの便器グッズ



▲ドイツで作られた紙製の使い捨て尿瓶



▲まるで芸術作品のような絵付けの大便器。江戸～明治時代の上流階級で使われていたと思われる。



▲トイレに関するありとあらゆる書籍が500冊以上!

プロフィール

アントイレプランナー
代表 白倉 正子氏



1973年群馬県生まれ。多摩大学を卒業後トイレ専門企画会社「アントイレプランナー」を創業(96年)。04~06年まで本誌「トイレの寺小屋」を執筆いただく。日本トイレ協会理事。著書に「私の人生は『トイレ』から始まった」(ポプラ社)がある。

文献に学ぶ「トイレ文化」



このコーナーでは、「トイレ文化」に注目し、トイレに関する興味深い文献をご紹介します。

第11回

古今東西トイレよもやま話

各地のトイレの歴史 4

平安時代、十二単と樋箱

平安時代の貴族達は、寝殿造の邸宅に暮らしました。そのトイレとは、屏風、衝立、几帳を立てたり、御簾を吊って間仕切りとした「樋殿」と呼ばれる空間でした。ここで用を足す時には、箱形持運び式トイレ「樋箱」が使われました。樋の意は、雨水を流す樋のように、排泄した糞尿を水で洗い去ることにあてはまります。

樋箱は、「しのはこ＝清箱とも書かれ、厠の箱、私の箱の意味があります」「おおつぼ＝御虎子とも書かれ、中国の虎子（フーツ）という広口壺の小便器に由来します、澁瓶のこと」「まりばこ＝糞箱とも書かれ、おまるの語源になったといわれます」などとも呼ばれます。これは、奈良時代に中国から伝わったといわれます。

十二単に身を包む平安貴族の姫が、樋殿に入るときは大変です。侍従は、姫の打掛を取り、袴を脱がせ、長い髪を前に回し帯に挟みます。長い把手の付いた鳥居形、またはT字形の棒を樋箱の背後に据え（「この棒を衣隠し」と呼ぶともいわれます）、侍従がこの棒に姫の十二単の長い裾を掛けながら、十二単の中に樋箱を押し込んであげます。姫は、裾を背後

の棒に引っ掛けたまま、脇を十二単で包み隠して、樋箱の上にしゃがみ、用を足します。現在の便器では、赤ちゃんのおまるのように、把手を手でつかんでしゃがむのですが、樋箱では把手がお尻側にあり、前後が逆だったことがわかります。用が済むと「樋洗」「御廁人」と呼ばれる女の子が箱を掃除します。

金隠し考

後の時代の樋箱には「金隠し」が付いていることがありますが、その場合は、金隠しを前にして使用します。この「金隠し」と平安時代の「衣隠し」とは形が似ていることや、「金隠し」という言葉が「衣隠し」から生まれたとする考えがあることから、両者が混同視されていることがあるようですが、機能は全く異なり、似て非なるものと理解すべきだと思います。

金隠しは、考古学的には、戦国時代の一乗谷朝倉氏遺跡に最古の出土例（15世紀末～16世紀末）があります。絵画では、これ以前、南北朝時代（1336～92年）の制作とされる『弘願本法然上人絵伝』『厠の念仏』に、僧侶が高下駄を履いて用を足している場面で金隠しが描かれています。そのような、一見、現在の和式トイ

レと変わりません。しかし、現在では、一般にトイレ個室の奥か横を向いて入りますが、この絵では、金隠しが入口側に付いているので、僧侶は前を向いて入っているという違いが見られます。

このように、金隠しが見られるようになる時代から推測すると、これは衣隠しから直接派生して生まれたのではなく、時期を改めて別の機能・目的のために生まれたと考える必要がありそうです。その誕生の背景には、平安時代までの貴族社会が、鎌倉時代以降武家社会へと移り変わったことに原因があるのではないかと考えられます。

その第1は、着用する衣服が変わったことです。そのため、服を支える必要が無くなり、衣隠しの機能は消滅してしまいます。第2に、武士達の敵に対する警戒心が考えられます。つまり、衣服をたくし上げ無防備になった部分を防御するため、金隠しが必要になったということが想像されます。なお、これと同じ理由で、敵に背中を見せないよう前向きにトイレに入ったと理解できます。そして第3に、小便をする際に、便器の外に飛び散らさないようにし、且つ便槽中に落ちるよう導くという、金隠し本来の機能をあげることができるでしょう。金隠しをわざわざ便器に付けたのは、より確実に便槽に小便を溜めようと考えたためで、その目的は、下肥の原料確保にあったと想像されます。鎌倉時代以降の中世都市の形成を背景に、下肥が本格化する中で、便器に金隠しを付設する工夫をしたのではない

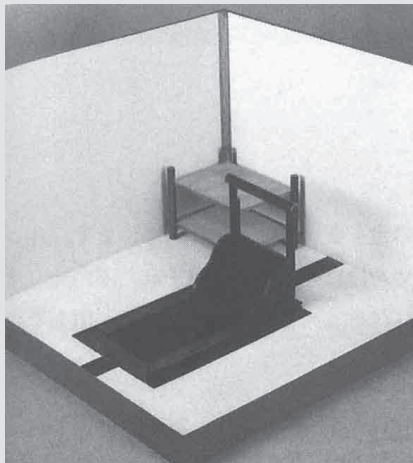


図1 紀州徳川家御殿のトイレ（模型）

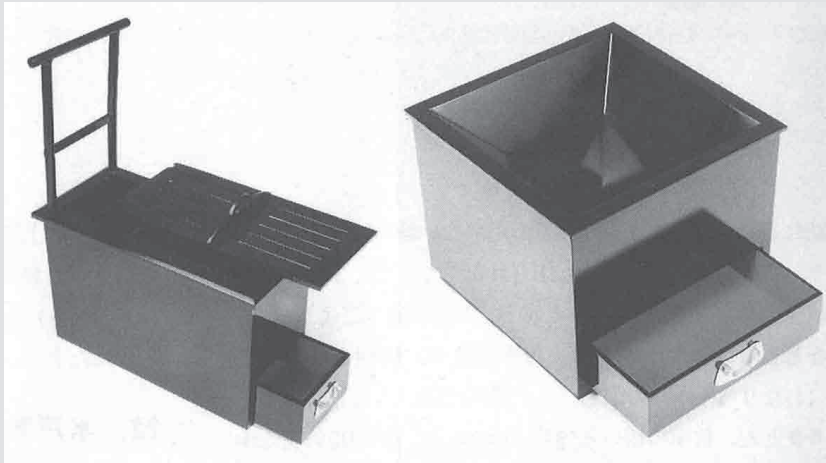


図2 御用場の樋箱（模型）／江戸城本丸御休息之間、御用場で、将軍が利用した大使用（左）と小使用（右）の樋箱です。利用の際は、畳の部屋に埋め込まれています。用が済むと抜き出され、引出しの中に溜まった排泄物を処理します。なお、引出しの中には、排泄物が処理しやすいように灰などが敷かれていました。これらは、当時の絵図面から復元しました。

でしょうか。

このように考えると、平安時代の「衣隠し」は貴族社会の崩壊と共に姿を消し、これとは全く別に、「金隠し」が鎌倉時代以降に誕生するということになります。ですから、樋箱の金隠しは、衣隠しとは関係無く、いくらかの時間を経て付けられるようになったといえるでしょう。

部屋に固定された「樋箱」

平安時代に持運び式だった樋箱は、鎌倉時代以降、そのまま「おまる」の機能を持ち続けるものと、部屋に固定されトイレとしての一室を形成するようになるものとに分かれるといわれます。

そして戦国時代、武田信玄（1521～73年）のトイレともなると京間六畳敷と広く、敵の来襲から身を守るため武器が使えるようになっていました。

また、朝、昼、晩と家来に番をさせ香の香りを絶やさないという気配りさえありました。

桃山時代、紀州徳川家の御殿のトイレでは、黒漆塗樋箱が設置され、手前には、黒漆塗二段作りの紙棚が置かれています。樋箱は二畳敷の部屋の真ん中にはめ込んであります 図1。

江戸時代も慶長年間（1596～1615年）を過ぎ平和な世が訪れると、城の天守閣は実戦に用のない飾り物的存在となり、ここにはトイレさえも作られなくなってしまいます。城主の居住

空間は本丸へと移り、「御用場」などと呼ばれたトイレは、将軍の接見に便利な御成廊下の隅といった場所に設けられるようになりました。将軍の用いる樋箱 図2は、御用場の真ん中にはめ込まれ、排泄物が滑ると、樋箱の下の引出しを抜いて処理します。引出しの中には灰や砂が入れてあり、排泄物をこれでまぶし取りました。

箱形の樋箱は、江戸時代末期から生産が始まる陶磁器製便器が生まれるまで続きます。陶磁器製便器も、初めは随箱の形をまねしていたのです。



【出典】 トイレの考古学・講演編（126-128頁）より転載
編集：大田区立郷土博物館
発行者：村山弘二
発行所：東京美術
発行：1997年5月30日